

従属節と「にちがいない」「はずだ」「べきだ」「わけだ」

—上級レベルの学生の誤用を通して—

市川 保子

要 旨

複文指導では、通常、ある従属節の形、意味、そしてその従属節の後ろに続く主節はどのような形をとるかが指導の中心となる。従属節がまずあって、主節を決めていくという→の方向の指導である。しかし中・上級レベルになると、言いたいこと「主節」があって従属節をどのように決めていくかという←の方向も必要となる。筑波大学留学生教育センターで行われている日本語・日本事情の作文Ⅱのクラスでは、必要に応じて短文作りを学生に課しているが、「主節」に応じた「従属節」がうまくできない場合が多い。特に「にちがいない」「はずだ」「べきだ」「わけだ」のようなムードの助動詞が主節末に来たとき、従属節に何を選び、従属節の節末をどうを整えるかがむずかしい。本稿は、ムードの助動詞をもつ主節と、それに見合う従属節をひとつづきのものと考え指導して行く場合、どのような点が問題になるかを学生の作文の誤用を通して考察する。

〔キーワード〕 複文、従属節、ムードの助動詞、概言の文、説明の文

1 はじめに

日本語教育ではある程度「単文」が定着したと思われるとき、「複文」の指導に入る。理由を表す「～から・ので」で結ばれる文、逆接を表す「～が・けれど」、「～て」、条件を表す「～たら・と・ば」、トキをあらわす「とき・前に・～てから・あとで」などでつながれた文である。

「単文」「複文」の定義はいろいろあるが、本稿では単純に、述部を一つしかもたない文を「単文」、一文中に述部を二つ以上もつものを「複文」としておく。¹⁾

複文はものごとを説明する場合に不可欠の表現形式であるが、「単文」と比べると考えねばならない要素が多く、学習者には習得に手間のかかる項目である。「複文」にからんでくる要素は、大きく形と意味の面に分けられる。「複文」は従属節が連用修飾節か連体修飾節かによって次の形をとる。

<連用修飾節>

従属節		主節	
主語	述語 (節末の形)	主語	述語 (主節末)
私が	行けば	彼も	行くはずだ。

<連体修飾節>

従属節		
主語	述語 (節末の型)	体言
	工場で働いている	人々

「連体修飾節+名詞」は主節の中に入っているいろいろな部分になる。(1)は主語に、(2)は目的語になっている例である。

- (1) 工場で働いている人々がストライキした。
- (2) 工場で働いている人々をもっと優遇すべきだ。

今ここで、連用修飾を中心に考えると、学習者は複文を作る場合、従属節の主語、述語、節末の形、そして、主節の主語、述語、主節末の形を考えることになる。これらの形は、それぞれの節の中での形とともに、一つの意味ある文として形式が整えられなければならない。「複文」の意味の面を考えると、次のように図示されよう。

従属節	主節
従属節の意味	主節の意味

文の意味	

一文全体の意味は、本来は一文にとどまらず、前後の文、その文を含む文章全体との関係するが、ここでは一文の意味を中心に考える。従属節の形と意味を重ね合わせると次のようになる。

学習者は、何を言いたいのか(文の意味)によって、従属節を選び、従属節の節末の形を整え、それが係っていく主節末をまとめなければならない。そのときに、従属節・主節の主語が異主語か同一主語か、主語を省略するか否か、主語は「は」をとるのか「が」をとるのか、また従属節、主節それぞれの、テンス・アスペクトも考えなければならない。

従属節			主節		
主語	述語	(節末の型)	主語	述語	(主節末)
従属節の意味			主節の意味		

文の意味					

従属節の形と意味は、多くの場合、主節の形と意味を、程度の差はあるが制約する。条件を表す「たら・と・ば」に例をとると、「たら」の主節末には意志の形や、依頼・命令の形は来うるが「と」や「ば」のときは来られない場合が多い。理由を表す「から・ので」では、「ので」は「から」ほど自由に依頼や命令を表すことはできないし、特に命令は「ので」とは共起しにくいと言えるだろう。

初級段階では、従属節の指導は、従属節の節末の形、従属節の意味が中心になる。節末の形を整えるだけでも学習者には大変で、主語が「は」をとるか「が」をとるかなどはしばらくしてからの課題となる。主節末の形や意味は導入段階で同時に指導されるが、はじめはあまり厳格でなく、基本的な約束ごとが押さえられるだけというのが普通であろう。

中級・上級段階では、複文の、一文としての意味の一貫性をもっと厳しく要求される。それまでに導入される従属節の種類も増え、例えば初級段階では、理由を表すものは「ので・から」「～て」だけだったものが、「ために」「せいで」「おかげで」「ものだから」「ことだから」など多岐に渡ってくる。そして、それぞれの意味の違い、使い分けが問題になってくる。

- (3) 彼が来たので、仕事ははかどった。
 彼が来たから、仕事ははかどった。
 彼が来たおかげで、仕事ははかどった。
 ?彼が来たせいで、仕事ははかどった。
 ?彼が来たものだから、仕事ははかどった。
 ?彼が来て、仕事ははかどった。

(3)は理由節をもつ文であるが、「仕事ははかどった」という単なる叙述表現でも、理由節によっては?を付けた文のように非文となるものがある。

「仕事ははかどった」のかわりに依頼の「仕事をしろ」を主文に置くと、?の数は(3)以上に増えるはずである。

- (4) ?彼が来たので、仕事をしろ。
 彼が来たから、仕事をしろ。
 ?彼が来たおかげで、仕事をしろ。

?彼が来たせいで、仕事をしろ。

?彼が来たものだから、仕事をしろ。

?彼が来て、仕事をしろ。

(3)は「仕事がかどった」というプラス評価のものに対して「せいで」「ものだから」「～て」が使えない、いわば意味的な制約である。また、(4)は、従属節「から」は主節が命令のときでも使えるが、「ので」「おかげで・せいで・ものだから」や「～て」は使えない、または使いにくいというムード的な制約である。

これらのことは、また、二通りに説明することができる。一つは、今言ったように「から」のときは命令は使えるが、「ので」「おかげで・せいで・ものだから」や「～て」のときは使えない、または使いにくいと説明する、つまり、ある従属節はある主節末を制約するという見方であり、これは従属節から主節を見る、いわば、→の方向の見方である。一方、逆に、主節末がある形をとると、それが従属節を制約するということもできる。つまり、主節が命令のときは、理由節として「から」は使えるが、「ので」「おかげで・せいで・ものだから」や「～て」は使えない、または使いにくいという言い方である。これは主節から従属節を見る、いわば、←の方向の見方である。

たぶん初級の段階では→の方向が指導の中心であろうが、それ以上の段階になると←の見方が必要になってくる。なぜなら←の見方は主節末、つまり主節のムードを最優先に考え、従属節をムードから見た一つの連用修飾機能要素としてとらえる方向だからである。これは一文全体の意味を最優先に考え、従属節をそれに従わせる方向だとも言えよう。

本稿は複文を取り上げ、主節が従属節をどう制約しているかを上級段階の外国人学習者の作文を通して考察する。方向としては←の方向であり、主節のムードが従属節の節末を選び、形をどう制限して行くかを見る。

2 主節末のムードと従属節

筆者が担当している日本語・日本事情の作文Ⅱのクラスでは、レポートや論文が書けることを最終目的にして、1年間をかけて授業が進められている。²⁾ 報告文、引用文、検証文などの書き方の流れを指導の中心にすえながら、部分的に未習熟な表現項目を復習する。「にちがいない」「はずだ」「べきだ」「わけだ」「のだ」などのムードの助動詞も、習得に時間のかかる項目である。日本語・日本事情に参加している学生は、学部生であり、他の教科では日本人学生と同じ授業を受けている学生である。日本語力も日本人学生と同等にやっていると判定されて入学を許可された者ばかりである。平成2年度のクラスは中国・台湾10人、韓国3人、インドネシア5人、マレーシア2人、アメリカ1人、帰国子女の日本人2人、計23人のクラスである。学力差がかなりあるが、学生間の学力差より、全体として、基本的なところでの正確さが足りないのが目立つ。以下の作文にも見ら

れるように、動詞の自他、それにとりなう助詞の間違ひ、「は」「が」、指示語などがなかなか使えない。

学生には「にちがいない」「はずだ」「べきだ」「わけだ」の4つの文末をもつ文を作ることを課題に出した。授業の過程でそれらが適切に使えていないと判断したからである。

学生には単文・複文に関する指示はしていない。指示しなかったにもかかわらず、出てきた作文はほとんどが複文で書かれており、また各々のムードの助動詞毎に、あらわれる従属節末に似かよりのあった。つまり「わけだ」には理由節が、「はずだ」には条件節が多くあらわれたということである。これらのことは、ムードを表す助動詞が、従属節なしでは、つまり文脈・状況なしでは使いにくい語であること、また学生は、どのような文脈・状況を必要とし、それを表す従属節末に何をいれればいいかがだいたいわかっている段階にいることを示していると言えよう。

2. 1 「にちがいない」

学生の作文の中で「にちがいない」にあらわれた従属節は次のようなものであった。

～ば	}	にちがいない
～たら		
～なら		
～ために		

このうち条件節の「ば／たら／なら」の使用が多く、学生は「にちがいない」は条件と結び付きやすいと考えていることがわかる。

「にちがいない」は話し手の確信的な判断を表す。ふつうは「だろう」や「かもしれない」より確信の度合いが強いと言われている。

寺村秀夫(1984)は次のように説明している。

ニチガイナイの特徴は、自分の思案、推量を自分に確かめるような、独白的な使いかたがふつうであるところにある。

(5)～(9)は判断の根拠に条件節を使ったものであり、(5)(6)が未定のことがらに対する、(7)～(9)は既定のことがらに対する判断である。

(上段は学生の作文、対照しやすいため下段()に筆者による訂正文を掲げる。<>内は学生の母語を示す。本稿では母語との対照にまで立ち入る余裕はないが、参考のために記しておく。)³⁾

- (5) 一生懸命勉強すれば、良い成績を取られるにちがいない。〈中〉
 (一生懸命勉強すれば、良い成績が取れるにちがいない。)
- (6) こんな空を見れば、今日の午後雨が降るにちがいない。〈イ〉
 (空の様子から見れば、今日の午後雨が降るにちがいない。)
- (7) 昨夜もう少し早く寝れば、朝寝坊をしなかったにちがいない。〈イ〉
 (昨夜もう少し早く寝ていれば、朝寝坊をしなかったにちがいない。)
- (8) もう少し早くお互いに話し合ったら、誤解ができなかったにちがいない。〈中〉
 (もう少し早くお互いに話し合っていたら、誤解がおきなかったにちがいない。)
- (9) この道で60 km のスピードで車を飛ばせば、事故を避けられなかったにちがいない。〈イ〉
 (この道を60 Km のスピードで飛ばしていれば/いたのなら、事故は避けられなかったにちがいない。)

従属節の節末について言えば、(7)～(9)は既定のことがらに対する、逆の仮想判断をあらわそうとしているのであるが、いずれも「～ている」が抜けている。「ている」がないと未定の条件になってしまう。これはアスペクトの問題が大きくかかわっているが、「寝れば」でなく「寝ていれば」、「話し合ったら」でなく「話し合っていたら」、「飛ばせば」でなく「飛ばしていれば」としてほしいところである。このへんのところが学習者にはむずかしいのである。

次は既定のことがらに対して理由節で根拠を示している例である。(10)は「ので」を、(11)は「ために」を使っている例である。

- (10) うれしそうな顔をしているので、彼が一学期の試験に合格したにちがいない。〈イ〉
 (うれしそうな顔をしているから、彼は一学期の試験に合格したにちがいない。)

(10)は「ので」にすべきか、「から」にすべきか個人差のあるところであろうが、筆者には、話し手の主観的な確信判断の根拠の理由づけには「ので」より「から」のほうが自然に思われる。しかし(10)は「彼の顔を見て」の確信判断であるので、「から」でもまだ不十分で、本当は(10)′または(10)″のようにしたいところである。

- (10)′ うれしそうな顔をしているところを見ると、彼は一学期の試験に合格したにちがいない。
 (10)″ 彼はうれしそうな顔をしている。一学期の試験に合格したにちがいない。

(11)は確信判断の理由づけに「ために」を使っている例である。

- (11) 次から次への台風のために今年の農産物の収穫は影響されるにちがいない。<中>
 (次から次へと台風が来たので、今年は農産物の収穫に影響がでるにちがいない。)

「ために」を使って (11)' (11)" のようにあらわしても落ち着きが悪い。

- (11)' 次から次へと来た台風のために、今年は農産物の収穫に影響がでるにちがいない。
 (11)" 次から次へと台風が来たために、今年は農産物の収穫に影響がでるにちがいない。

理由節「ために」は主節に話し手の判断でなく単なる結果のなりゆきの表現が来ると落ち着く。

- (11)''' 次から次へと台風が来たために、今年は農産物の収穫に影響がでた。

いずれにしろ「ために」は話し手の確信的な判断表現とは結び付かず、「ので」か「から」に置きかえる必要がある。(10)では「ので」は不自然だとしたが、筆者の訂正文でもわかるように、(11)ではそうではない。問題にすることがらが(11)ではすでに起こった客観的な事実であり、そのときは「ので」でいい。ということは、主節末が「にちがいない」のとき、そのことがらが客観的な既成の事実かどうか、またそれを主観的にとらえるか否かで「ので」と「から」の使い分けがなされると言えよう。

(12)は理由づけを従属節にうまくできないでいる、学習者がよくするリダントな誤りである。理由づけを前置きの(主題的に)提出し、しばしば逆節をあらわす「～が、」で受けて、主節へつないで行くやり方は日本語ではよく使われるが、学習者にはなかなか身につかない点である。

- (12) 彼が昨日ここに到達しなかった原因はきっとトラブルにあったにちがいない。<日・中>
 (彼は昨日ここに到達しなかった(が)、きっとトラブルにあったにちがいない。)

2. 2 はずだ

学生の作文の中で「はずだ」にあらわれた従属節は次のようであった。

～ば	}	はずだ
～たら		
～から		
～ので		
～て		
～ために		

「はずだ」は「にちがいない」と異なり、話し手の判断の基準がより客観的とならなければならない。寺村は次のように説明している。⁴⁾

ハズダが前節の概言的判断と異なるところは、自分の推量というのではなくて、これこれの事実があれば当然こうなる、そういう状況にあることを相手に伝える表現だという点である。

(13) (14) では条件節「ば」「たら」が判断基準になっている。

(13) 頑張って練習すれば、チャンピオンになるはずだ。〈イ〉

(頑張って練習すれば、チャンピオンになれるはずだ。)

(14) 勉強したら、この試験が大丈夫はずだ。〈中〉

(勉強すれば／したら、この試験は大丈夫なはずだ。)

(15) 以降は理由節が判断の根拠になっている。本稿は主節末から従属節を見、主節と従属節の関わりを考察しようとするものである。したがって次のような「はずだ」と、他のムード「にちがいない」「だろう」「つもりだ」「べきだ」「なければならない」などとの混同は直接の考察対象にはしないが、興味ある誤用であり、また学生のおかしやすいところでもあるので、例を示しておく。

(15) かなりひどい台風だから、彼はこないはずだ。〈中〉

(かなりひどい台風だから、彼は来られない／来ないにちがいない。)

(16) 空がくもってるから、雨がふるはずである。〈イ〉

(空がくもっているから、雨がふるだろう。)

(17) アインシュタンの相対性論理は、難しく、私なら判らないはずだ。〈中〉

(アインシュタンの相対性論理は、難しく、私にはわからない(だろう)。

(18) もう時間なのに、Aさんがまだこないから、今日も欠席するはずだ。〈中〉

(もう時間なのに、まだ来ないところを見ると、Aさんは今日も欠席するつもりだ。)

(19) 何かをする前、私達が深く考えるはずだ。〈イ〉

(何かをする前、私達は深く考えるべきだ。)

上の例で言えることは、「ひどい台風」だとか「空がくもっている」とかいうような単なる話し手の想像だけでは、主節の事態を「はずだ」と確信する根拠とはなりえないということである。「ひどい台風」で、なおかつ彼について「家が遠い」「小さい子どもがいる」などの事実的根拠がないと「はずだ」は使えない。(16)も「くもっていて」なおかつ「この辺はくもっているといつも雨が降る」というような事実がなければならぬ。(18)も同じで、「まだ来ない」という現象だけで

は「はずだ」の理由づけにはならない。

「根拠」の確実性というところからはなれて(18)を見ると、(18)はまた2・1「にちがいない」の(12)と共通の問題を呈している。(12)では理由づけが「から／ので」と直接結び付かず、前触লের的に「が」で出したほうがよかった。(18)も理由づけを「から」と直接的に出すのではなく、主題的、前触লের的に「Aさんはまだ来ないが、」とするか、(18)'のように「Aさんはまだ来ない。」¹と言いきりの形で理由づけを示すことも教えていかなければならない点である。

(18)'もう時間なのにAさんはまだ来ない。今日も欠席するつもりだ。

次の(20)にもこのことはあてはまる。

(20) 中東危機が起こったから、大戦争になるはずだ。〈イ〉

(中東危機が起こった。近いうちに大戦争になるはずだ。)

理由づけに少し不安がある場合「はずだ」は「にちがいない」のときと同様「ので」では少し落ち着きが悪い。

(21) 彼はとてもかしこいので、こんな誤りをしないはずだ。〈中〉⁵⁾

(彼はとてもかしこいから、こんな誤りはしないはずだ。)

(22) 先見たので先生は研究室にいるはずだ。〈中〉

(さっき見かけたから、先生は研究室にいるはずだ。)

(21)では「彼はかしこい」だから「こんな誤りはしない」との判断であり、もし「彼のかしこさ」が万人の認めるところであったとしても、もしかすれば「誤りをするかもしれない」可能性は残されている。同様に(22)では「さっき見かけたとき先生がいらっした」のはまぎれもない事実であるが、少し時間のたった今「いらっしないかもしれない」可能性を残している。このような不確定要素があるときは判断に主観が入り、より確実性をもった因果関係をあらわす「ので」より、主観的で確実性に乏しい因果関係もあらわせる「から」のほうが落ち着くようである。

2. 3 べきだ

学生の作文の中で「べきだ」にあらわれた従属節は次のようであった。

～ので	}	べきだ
～から		
～ために		

「べきだ」は「にちがいない」「はずだ」と異なり推量意識は全くない。ほとんど選択の余地のない、当然の結論としての意見や、当然の帰結であることがらを示す。そのものの立場や状況から当然そうあらねばならないという話し手の強い意志・意見をあらわす。⁶⁾ (23) はそのところがわからなくて「はずだ」と混乱している例である。

(23) この時期、コスモスが咲くべきだ。〈中〉

(この時期になれば、コスモスがさくはずだ。)

「べきだ」は話し手の強い意志・意見をあらわすため、その理由づけはかなり明確な形をとる。

(24) せっかく大学に入ったので、ちゃんと授業に出るべきだ。〈中〉

(せっかく大学に入ったのだから、ちゃんと授業に出るべきだ。)

(25) 大学生はもう成人になっているのもっと自立すべきだ。〈中〉

(大学生はもう成人になっているのだから、もっと自立すべきだ。)

「にちがいない」「はず」では主観の入った理由づけには「ので」より「から」がふさわしかったが、「べきだ」の場合「から」だけでも落ち着きが悪い。

(24)' せっかく大学に入ったから、ちゃんと授業に出るべきだ。

(25)' 大学生はもう成人になっているから、もっと自立すべきだ。

「べきだ」はある既定の事実・前提 ((24) では「大学に入ったこと」(25) では「成人になっていること」) があって、その前提を全うするために、当然「～すべきだ」となる。前提による理由づけをあらわすため「のだ」と結び付くのであろう。

前提が一般的、恒常的な真理をあらわすときは、「ん／のだから」のかわりに「ものだから」になる。

(26) 女心は秋の空のように変わりやすいから、男性として女の心をもっと理解すべきだ。〈イ〉

(女心は秋の空のように変わりやすいものだから、男性としては女の心をもっと理解すべきだ。)

2. 4 「わけだ」

「わけだ」にあらわれた従属節は次のようであった。

～たら	}	わけだ
～と		
連用中止		
～て		
～ので		
～から		
～のだから		
～せいで		
～ために		

「わけだ」の用法のひとつに理由をあらわす節が前件に来て、結果をあらわす節が後件に来るものがある。

(27) 彼は、今日は忙しいから来られないわけだ。〈英〉

「わけだ」文では通常、既定の事実があり、その事実から導かれる当然の帰結として「わけだ」が出てくる。(27)を例にとると、(27)は「彼がまだあらわれていない」という事実があり、「彼は今日は忙しい」という情報を得て初めて生まれる文である。

「わけだ」を使った文を作らせると、必ず出てくる誤りは「からだ」との混同である。(28)(29)はその例である。

(28) 先生にしかられたのは、宿題をちゃんとやらなかったわけだ。〈中〉

(先生にしかられたのは、宿題をちゃんとやらなかったからだ。)

(29) 石油の価格が上がることは、中近東に問題があって、石油の生産が停滞しているわけだ。〈

中〉

(石油の価格が上がったのは、中近東に問題があって、石油の生産が停滞しているからだ。)

(28)(29)を「わけだ」文であらわすと(28)'(29)'のようになる。

(28) 宿題をちゃんとやらなかったから、先生にしかられたわけだ。

(29) 中近東に問題があって、石油の生産が停滞しているから、石油の価格があがったわけだ。

学生の作文に理由節が多く使われているところを見ると、学生達は理由節が前に来ることはわかっているが、既定の事実と理由、つまり結果と理由の因果関係をどう「わけだ」文に取り込んでいいかわからないと思われる。

次の(30)も「彼が怒った」という既定の事実と、「誰かが彼を待たせた」という情報があって発せられる文である。

(30) ずっと待たせて、彼は怒ったわけだ。〈英〉

(ずっと待たせたので、彼は怒ったわけだ。)

(30)は「～て」を「ので」にかえても、どこか要領を得ない文である。果して(30)を作文をした学生の頭の中で、「わけだ」文ができるまでに、次のような因果関係が成り立っていたかどうかは疑問である。

(30) 彼は怒っている。ああ、そうか。山田さんが彼を長時間待たせたんだ。ずっと待たせたので、彼は怒っているわけだ。

「～て」に関しては、話し手は得た情報で事態を理由づけ、判断するわけであるから、ときに理由づけが明確でなくなる連用中止形や「て」形では不十分となると考えられる。

次は「わけだ」の既定の事実に対する理由づけができなくて、未定の条件節を使っている例である。ここにもアスペクト「～ている」の存在が問題になってくる。

(31) たくさん運動したら体がよくなるわけだ。〈日・西〉

(彼はたくさん運動しているんだから、体が丈夫なわけだ。)

(32) 毎日500回なわ跳をして、筋肉が強くなるわけだ。〈中〉

(毎日500回なわ跳をしていれば、筋肉が強くなるわけだ。)

(33) 毎日たくさんのチョコレートやアイスクリームなどの高脂肪ものを食べると、きっと太るわけだ。〈中〉

(毎日たくさんのチョコレートやアイスクリームなどの高脂肪物を食べていれば、太るわけだ。)

理由づけと言っても「せいで」や「ために」は「わけだ」とは結び付きにくい。

- (34) 雨がざあざあ降っているせいで、学校を休むわけだ。〈イ〉
(雨がざあざあ降っているから、学校を休んだわけだ。)

- (35) 先生の話がわかりにくいし、教科書も読みにくいのためにこの授業がだんだんつまらなくなるわけだ。〈イ〉
(先生の話はわかりにくいし、教科書も読みにくいので、この授業がだんだんつまらなくなってきたわけだ。)

次は理由づけが二つ以上あるとき従属節末に何を持っていけばいいかわからない例である。

- (36) 学校が遠いので、家から30分ぐらいかかるから、オートバイを買うわけだ。〈イ〉
(学校が遠くて、家から30分かかかるから、オートバイを買うわけだ。)

3 まとめ

以上、「にちがいない」「はずだ」「べきだ」「わけだ」が従属節をとるとき、どのようなところが学生にとってむずかしいかを学生の作文を通して見てきた。

今回の作文で問題が顕著に出てきたのは、条件節と理由節に絞られる。これらのムードの助動詞では、いかに条件節と理由節がうまく使えるかがポイントになると言えよう。条件節の使い方としては、

- ①条件節で述べられることがらが既定のことがらか未定のことがらか
- ②既定のことがらであれば「～ている」が必要かどうか

が重要となる。一方、理由節では、次の点がむずかしいと言えよう。

- ③「ので」と「から」の使い分け
- ④「から」と「のだから」の使い分け
- ⑤「ために」「せいで」「ものだから」などの理由節と「ので／から」の使い分け
- ⑥「～て」と「ので／から」の使い分け

また、条件節と理由節に共通して言えることは、条件・理由になることがらが、何らかの事実・前提に立っているかどうかの判断ができるか否かという点である。その事実・前提が既定のものか

未定のもので条件節を使うか理由節を使うかの選択もしなければならない。そしてその事実・前提に対して条件・理由節をどう立てるかもむずかしい問題である。何が事実・前提となっていて、条件・理由とどういう関係にあるのかをつかませる指導が必要であろう。また、「にちがいない」「はずだ」のところで述べたように、事実・前提を単独文、または「～が」で導かれる前触れ文として出し、次に理由節で自分の判断を述べるという形が十分練習されるべきである。

4 おわりに

今回課したように、ムードの助動詞を与えて文を作れというのが、その語の正しい使い方の指導にふさわしいかどうかは問題のあるところである。

「わけだ」を使った学生の作文(27)～(36)には、確かに「わけだ」が使っており文として間違いではないが、これらの文はいつ使うのかという疑問が残る。ある状況・文脈があってはじめて出てくる文であるから、その状況・文脈を省いては本当に「わけだ」文ができたとは言えない。「にちがいない」「はずだ」「べきだ」も程度の差こそあれ、同じことが言えよう。課題を出すときに状況・文脈のともなった作文をするよう指示すべきで、反省とするところである。

本稿では、ムードの助動詞を持つ主節と、従属節のかかわりをみてきた。

(37)を見ると、主節の節末は、中・上級段階の学習項目である複合助詞とも深くかかわっていることがわかる。(37)は「によって」を「はずだ」と結び付けようとおかした誤りである。

- (37) 科学技術の進歩によって、人間が他の星でも住めるはずだ。＜中＞
(科学技術が進歩すれば、人間が他の星でも住めるはずだ。)

次は複合助詞「にとって」を使った作文であるが、文末と「にとって」がうまく結び付いていない。

- (38) あの人の行為、私にとってほんとに譲せないのだ。＜マ＞
(あの人の行為は私にとって絶対に許せないものだ。)
- (39) わたしにとってその問題はむずかしと思う。＜イ＞
(その問題は、わたしにとってむずかしい問題だ／むずかしすぎる。)
- (40) 親にとって自分の子供は世界一番可愛です。＜中＞
(親にとって自分の子供は世界一番可愛いものです。)

「にとって」は、訂正文で示したように、文末に「～ものだ」「～ことだ」または「～すぎる」のような評価をあらわす表現が来ると文が安定する。⁷⁾

複合助詞を指導する場合も、普通は、ある複合助詞を使えばどのような文末をとるかという→の

方向の指導がまずなされる。しかし主節末から従属節を見たように、文末から複合助詞を見る←の方向もとれるはずである。例えば、「ものだ」「ことだ」の導入と同時に、または、それらの導入のかなり早い時期に複合助詞「にとって」と組み合わせて指導するやり方である。

従属節、ムードの助動詞、複合助詞などは、特に中・上級レベルでは、ばらばらに切り離して指導されるべきものでなく、→、←などの方向から統合的に指導されるべきであると考えられる。

(注)

- 1) 北条淳子(1988)の考え方に従った。
- 2) 日本語・日本事情の作文クラスでは教科書として『実践日本語の作文』凡人社を使用している。
- 3) 紙面の関係上母語のあらわし方について次のような省略を行う。
中(中国語)、イ(インドネシア語)、英(英語)
日・中(日本語と日本語を話す帰国子女)
日・西(日本語とスペイン語を話す帰国子女)
- 4) 寺村は概言の文(「にちがいない」「かもしれない」「だろう」「ようだ」「らしい」などの文)に対して「はずだ」「わけだ」「ところだ」「ことだ」「ものだ」「のだ」の文を説明の文として区別している。
- 5) (19)は(19)''のように「かしこい人」と連体修飾句にして一般化させたほうが落ち着く。
(19)''彼はとてもかしこい人だから、こんな誤りはしないはずだ。
- 6) 森田(1980)
- 7) 北条(1988)によれば、「にとって(は)」の文末は状態を表す語であり、「[N₁はN₂だ」の文型が基本としてあり、それに「私にとっては」が付加されて「私の立場から言わせてもらえるならば」というように、「としては」に比べるとかなり受け身的な感じの言い方である。」

(参考文献)

- 北条淳子 1988 「複文文型」『談話の教育と教育Ⅱ』国立国語研究所
寺村秀夫 1986 『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版
森田良行 1980 『基礎日本語2』角川書店